

東北学院大学教育研究所2017年度活動

1. 教育研究所報告集第17集 配布・発送：2017年3月

学内配布240部 学外発送233部

2. 所員会議 2016年8月22日(土) 15:20～16:30

場所：教育研究所（泉キャンパス4号館4階）

出席者（敬称略）：

菅原研（教養学部）、千葉昭彦（経済学部）、楠義彦（文学部）、乙藤岳志、坪田益美、
片瀬一男、渡部友子、金井嘉宏、岡崎勘造（以上、教養学部）

欠席者（敬称略、*は委任状提出）：

尾田基*（経営学部）、遠藤孝夫*（工学部）、鈴木利則（工学部）、
菅原真枝*（教養学部）、白井哉嗣*（法学部）

1. 報告事項

(1) 平成28年度決算および平成29年度予算

資料1に基づき、平成28年度決算および平成29年度予算の執行状況を報告

(2) 平成28年度学会出張

平成28年度出張内容の確認、第23回京都大学教育フォーラムの報告を研究所報告集次号に投稿するように依頼（片瀬先生）

(3) その他

- ・教育研究所と学長室IR課の役割分担に関する現状報告
- ・新入生意識調査・卒業生意識調査に学生番号記入を義務化する件についての進捗報告
- ・研究所所蔵図書を図書システムに組み込む件についての状況報告

2. 審議事項

(1) 今年度の活動計画

所員を派遣する学会および候補者の選定（資料2）

第39回大学教育学会

渡部先生（出張済み）

第67回東北・北海道地区大学等・共通教育研究会

菅原研先生

大学教育学会課題研究集会
第24回京都大学研究フォーラム

片瀬先生 + 1名(未定)
千葉先生、坪田先生

(2) 報告集18集について

- ・片瀬先生、渡部先生、嶋田先生（ラーニングコモンズ助教）が寄稿予定
- ・佐藤司郎先生に執筆依頼（楠先生が確認）
- ・新入生意識調査の分析・寄稿を神林先生に依頼（菅原が確認）

なお、東北堂の廃業に伴い、新たな印刷会社の選定に向けて2社から相見積もりを取ることを確認した。また、乙藤先生より意識調査の分析・寄稿については隔年毎でどうか、との提案があった。

(3) 来年度の予算編成について

基本的に今年度と同様に申請

(4) その他

研究所所蔵図書を学内図書として検索できるように、段階的に移行が可能か研究機関事務課へ働きかけをする事が片瀬先生から提案された。

- ①今後購入分から研究機関事務課の図書係を通して発注できるか
- ②リスト化されているものから組み込んでいけるか

教育研究所参加の2017年度学会・研究会

以下、教育研究所が機関会員になっているFD関係の学会ならびに所員が継続的に参加している研究フォーラム等の2016年の活動を報告します。この種の学会やフォーラムに参加を希望される教職員は、本学の「FD推進委員会」管轄の旅費をご活用して下さい。詳しくは、各学部のFD推進委員会委員にお問い合わせ下さい。

1. 大学教育学会第39回大会報告

会場校：広島大学総合科学部（広島大学東広島キャンパス）

日 時：2017年6月11日（土）、12日（日）

参加者：渡部友子

統一テーマ「教養教育の再考」

趣旨：大学設置基準の大綱化以降、教養教育の理念が崩壊して無規範状態に陥っている。しかし、世界の未来が混沌とするなか、どんな教養教育をすればよいのかも見えにくくなっている。本大会では、先行き不透明な時代における大学そのものの役割を踏まえながら、教養教育のあり方について改めて議論したい。

6月11日（土）

ラウンドテーブル14件（参加せず）

事業報告会

概要：新会長の告示、収支報告のほか、会長特別賞と学会認定書籍の授与式が行われた。どちらも昨年度からの新しい制度である。

基調講演 池内了（名古屋大学名誉教授）「大学と社会：教養教育に期待すること」

概要：教養教育が果たすべき役割として、大学と社会との接点を含み込むことが挙げられた。学生一人一人が自分を知り、人格を磨き、社会に責任をもち、社会を変革する意欲を持つことを助けるような教育をすべきだと言うのである。社会が抱える問題が複雑化する中で、自分なりの行動原理や考えを持つように導かなければならない、と池内氏は主張した。

シンポジウム 危機に立つ教養教育：大綱化後四半世紀の課題と将来

近藤孝弘（早稲田大学）「市民性教育の観点から」

高橋直也（大阪府立大学）「数理教育の観点から」

布川宏（広島大学）「平和教育の観点から：被爆証言から学ぶヒロシマ」

羽田貴史（東北大学）指定討論者

概要：まず高橋氏がドイツの教育を紹介した。ドイツでは民主主義を守る市民を育てる、という目的で、政治教育が重視されている。学校・大学を卒業した後も、社会の問題を認識し、その解決に取り組むためには政治への参加が不可欠、と考えているようである。高橋氏は、日本の学生が数学を数学として学ぶのは得意でも、身近な問題の解決と方法として数学を使うのが苦手であるのは、数学教員自身がそうだからだ、と指摘した。つまり、数学研究者には数学を数学として絶対的に愛し、その実用的側面に興味がない人が多いのである。教養教育としての数学は、問題解決の手段としての側面を中心に据えるべきである、と氏は主張する。布川氏は、複雑な問題（例えば被爆証言）に直接ふれて理解しようとすることで、受け止めて考える学生を育てたい、とする。単純化して与え「わかった」と思わせる教育は、思考を育てない、と氏は考える。最後に、3氏の主張を受けて羽田氏が発言した。氏は大学の専門教育に教養が欠如している、つまり狭い範囲で専門化する傾向にあることを危惧し、教員自身が知識と視野を広げる努力をすべきだと訴えた。

6月12日(日)

午前 自由研究発表Ⅰ部会 1～9

午後 自由研究発表Ⅱ部会 10～19

ポストワークショップ2件（参加せず）

概要：午前と午後にそれぞれ、9-10部屋で同時に5-6件の発表が連続で行われた。以下が参加した発表のタイトルである。

部会3「教育方法・授業改善」

「問い」を立てる能力とは何か

「学びの深さ」に影響を与える学習動機の類型化

部会6「初年次教育」

初年次学生レポートにおけるインターネット上の参考文献の分布

初年次教育における科学実験が文系学部学生の専門教育課程に与える影響

エビデンスに基づくカリキュラム改善プロセスとデザイン
初年次教育テキストの開発と今後の課題

部会13「教育方法・授業改善」

中級者を上級へ導く英語コミュニケーション力向上プログラム策定の試み
レポート論題と評価の種類

部会19「初年次教育」

初年次教育における多文化クラスの教育的効果
学生の主体性を引き出す導入教育としてのオリエンテーションの再構築
上級生を活用した新入生の大学適応プログラムの実施と成果
関わった上級生たちのその後のさらなるPBL

このうち、最も印象に残ったのは部会3の「問いを立てる能力」についての発表である。福岡大学教育開発支援機構所属の須長氏が、発問能力育成の困難さを、以下のように論理的に説明した。

わからないことを質問するためには、「今自分が読んだ・聞いた説明には、欠落している部分がある」と認識できなければならない。そして欠落を認識するためには、情報が揃った完全な形が認識できていなければならない。しかし知識が不十分な人間には、完全な形がどんなものかわからない。今持っている情報がすべてである。だから欠落が認識できないのである。つまり「わからない」という認識は、あるべき姿を「わかっている」ことを前提とする、という逆説が存在する。これが発問能力育成を難しくしている。

これにより「何がわからないか、わからない」という現象に説明がつくように思われる。

この他、科学実験を通して研究の組み立て方の基礎を学ぶ、という実践には、学士力の基盤育成の方法としての面白さを感じた。また、留学生を巻き込んだ多文化クラスや、上級生が新入生を支えるプログラムの組織化は、本学でも実現できればよいと思う。

(文責：渡部友子)

2. 第67回 (2017) 東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会

平成29年月24日 (木)、25日 (金)

東北大学川内北キャンパス

10:00-17:00, 9:30-12:00

参加者 菅原 研

8月24日午前

総会 I で各種報告がなされた後、全体会 I として基調講演が行われた。講師は東北大学高度教養教育・学生支援機構教授の羽田貴史氏で、「教養教育の危機—アメリカ・欧州・日本—」という題目での講演であった。まず現代世界が直面している問題（人口増加の問題や環境問題、経済的格差の問題など）に触れ、それらの問題に取り組むうえでの教養教育の重要性について言及した。つづいて、アメリカの大学における教養教育の危機について論じられた。リベラルアーツカレッジの減少や人文学、教育などの学士学位の減少、学生の知的欲求の衰退、経済的な成功をもたらすシステムにシフトする大学教育の姿勢の問題、学習成果の測定と学問の自由の間に生じる葛藤、財務健全性の公開に伴うカレッジ閉鎖の問題など、様々な視点からアメリカの教養教育が抱える問題と危機について解説がなされた。次にヨーロッパにおける危機とシティズンシップ教育についての解説があった。OECDはもともと経済協力機構として発足したが、現在では「いかに社会の中心として活躍できる人材を育てるか」という教育問題にも注力しているとのことである。続いて、日本の大学が抱える教養教育の問題について論じられた。現代社会が直面する課題に大学教育が正しく向き合っていないこと、特に世界の取り組みについて部分的な動向のみに注目して正しい判断ができていないこと、国家戦略としているグローバル人材の具体的な像が結局のところ利潤率の目線でしか考えられておらず、その基本にある思想が100年前と何も変わっていないこと、などの問題点が提示された。その上で、なぜ高等教育の現実に新しい教養教育像が盛り込まれないのか、について解説され、最後に教養教育を再生するために必要なこと、として5つの項目が挙げられた。本講演の基本的なスタンスは、現状および改善に向けた試みの内容を是としない側にあり、全体的に辛口かつリベラルな論調であったが、それゆえ賛否両論で議論が白熱しうる刺激的な講演であった。

8月24日午後

3つの分科会に分かれて事例報告がなされた。

第1分科会「教育プログラム構築への組織的取組」

第2分科会「外国語教育／グローバル教育の新展開」

第3分科会「授業開発・学習支援の新たな取組と可能性」

各分科会とも6件の話題提供で構成されていた。本研究所がIR機能の一部を担っていることもあり、次の2件の話題があった第1分科会を主として聴講した。

「教学IR情報を活用した学習支援の試み（岩手大学 江本先生）」

「東北大学における教育・学習活動に関するIRの取組（東北大学 川面先生）」

中規模でIRに関する専門部署を持たない大学と大規模で専門部署を持つ大学の対照的な話

題提供でもあり、内容も興味深いものであった。質疑も活発に行われた。いずれの例においても、相関についての情報を得て、教員の感覚的な理解を可視化することについてはうまくできている、あるいはできつつあるが、問題解決のための因果関係を割り出すことまでは踏み込めていないこと、因果のポイントはいかに質の良い仮説を立てるか、というところであり、IRの枠だけでそこまで踏み込むには限界があることなどが論じられた。

8月25日午前

全体会Ⅱが開かれ、講演がなされた。講師は山口大学大学教育センター副センター長の小川勤氏で、「山口大学における高等教育改革の現状と課題—共通教育カリキュラム改革、学習成果の可視化、アクティブラーニング等—」という題目での講演であった。山口大学は早い時期から各学部・学科別に教育理念や目標をより具体化したポリシーやマップの作成を行い、カリキュラム・授業の検証・改善を積極的に行ってきた。ディプロマポリシーと各授業の整合性の検証、講師派遣型アラカルト式FD研修会、成績分布共有システム、共通教育の厳選と必修化、共通教育における全学部出動体制の確立などの興味深い取り組みについての紹介と、その成果（必ずしもうまくいっていることばかりではないことも含めて）について解説がなされた。

1日目の基調講演は教養教育の在り方についての鳥瞰的なものである一方、2日目の講演は具体的かつ実践的な教養教育の運用法についての講演ということで、ある意味、対照的な内容であり、たいへん興味深い組み合わせであったといえる。

つづいて分科会報告がなされた。それぞれの分科会の代表が前日の分科会の内容について報告を行った。その後、総会Ⅱが開かれ、次期当番大学、次々期当番大学等について紹介がなされたのち閉会となった。

3. 大学教育学会第39回大会課題研究集会

会 場：関西国際大学尼崎キャンパス

会 期：2017年12月2日～3日

主 催：大学教育学会第39回大会実行委員会

参加者：片瀬一男

大会テーマ：大学教育は“役に立つ”のか

概要：「大学教育は役に立っているのか」という問いかけは、これまでも産業界やマスコミ

などからなされてきた。昨今、就職状況は好転したと言われつつも、就業構造はこれからAIやロボットの発達で日本人雇用者の49%が職業移動を余儀なくされるという大変革期にあり、“就職したら何とかなる”ということが言えなくなってきた。ここで原点に立ち戻って考えなければならないのは大学教育が「役に立つ」とはどういうことなのか、という課題である。大学教育は中長期的な視点に立ち、学生にどのようなことを学ばせ、身につけさせることが必要なのかを考えなければならない。アクティブラーニングが伸ばそうとしている力、あるいはSTEM (Science、Technology、Engineering and Mathematics) 教育を通じて身につけさせようとしている力、いずれも大学側が「役に立つ」ことを期待しての取り組みともいえる。その一方で、社会からも先端的な教育や教養など、さまざまな立場から、役に立つ大学教育が求められている。

これらを視野に入れつつ、本課題研究集会では、“役に立つ”ということがどのような意味をもち、大学教育が果たす役割とは何なのかということ、原点に戻って問い直すことが主題となった。

基調講演「職業キャリアの変化と大学の役割」

講師：小杉 礼子氏（独立行政法人 労働政策研究・研修機構 特任フェロー）

講師の小杉玲子氏は、独立行政法人 労働政策研究・研修機構に所属し、大卒就職の研究を専門としている。とくに玄田有史・東京大学教授とともに、「フリーター」という語を巷間広げた教育社会学者であるが、今回の講演は景気回復と少子化によって一転して「売り手市場」となった大卒労働市場を豊富な統計資料をもとに解説した。そのうえで、今後の見通しとどういふ学教育の在り方について提言を行った。それによると、確かに今は大卒者にとって労働市場は「売り手市場」となっているが、今後、AIの導入によって事務労働が機械化されるため、人文社会系学部(特に女子)の就職先であった事務職の求人が減少する恐れがある。そこで今後はAIにはできないこと、すなわち価値判断に不可欠の倫理教育が必要となる。また、AIを支えるSTEM (Science、Technology、Engineering and Mathematics) 教育もまた重要度を増すとのことであった。

■開催校企画シンポジウム「大学教育は“役に立つ”のか」

概要：「大学教育は“役に立つ”のか」というテーマのもと、企画委員の深澤晶久氏（実践女子大学）の司会により、遠藤勝裕氏（独立行政法人日本学生支援機構）には、企業・社会が求める人材像について、上村和美氏（関西国際大学）には、大学教育と産業界との連携構築に向けた実践例について話題を提供してもらった。また、松村直樹氏（株式会社リアセック）は、キャ

リア教育研究の視点にもとづく大学と社会との橋渡しについて論じた。さらに、スーザン・アルバティーン氏（全米大学・カレッジ協会（AAC&U）、大阪大学）には、アメリカの大学の状況について、興味深いコメントをいただいた。さらに、基調講演者の小杉氏もコメンテーターとして登壇し、パネルディスカッションが行われた。社会変動の速度が速まる中で、教育や評価に関する大学と企業との対話がますます重要になることが論じられた。

■課題研究シンポジウム

課題研究シンポジウムとしては、同学会が継続して取り組んでいる以下の2つのテーマをめぐってシンポジウムが行われた。

シンポジウムⅠ

「アクティブラーニングの効果検証－プロジェクト最終年を迎えて（2015～）」

シンポジウムⅡ

「現代のリベラルアーツとしての理数工系科目（STEM）の開発と教育実践のために（2016～）」

4. 第24回大学教育研究フォーラム

会 場：京都大学 吉田南1号館キャンパス

会 期：2018年3月20日（火）～21日（水）

主 催：京都大学高等教育研究開発推進センター

参加者：千葉昭彦、坪田益美

教育研究所購入図書一覧（2006年以降）

教育研究所の所蔵図書の閲覧を希望される教職員の皆様は、当研究所までお申し出ください。所定の手続きを踏まえて貸出をしております。

2017年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・主体的学び別冊 特集高大接続改革、主体的学び研究所 2017年
- ・戦後日本教育方法論史（上）、田中耕治、ミネルヴァ書房 2017年
- ・戦後日本教育方法論史（下）、田中耕治、ミネルヴァ書房 2017年
- ・授業の見方、澤井陽介、東洋館出版社、2017年
- ・学習者中心の教育、メルソン・ワイマー、勁草書房 2017年
- ・私立大学はなぜ危ういのか、渡辺孝、青土社、2017年
- ・大学と学問 リーディングス日本の高等教育5、橋本鉦市、玉川大学出版
- ・大学と学問 リーディングス日本の高等教育6、橋本鉦市、玉川大学出版

2016年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・たったひとつを変えるだけ、ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ、新評論、2016年
- ・大学入試改革、読売新聞教育部、中央公論社、2016年
- ・なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか、山本崇雄、日経BP社、2016年
- ・ファシリテーションで大学が変わる、中野民夫、ナカニシヤ出版、2016年
- ・大学のアクティブラーニング、河合塾、東信堂、2016年
- ・アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ、池田輝政・松本浩司、ナカニシヤ出版、2016年
- ・「主体的学び」につなげる評価と学習方法、J.ウイルソン、東信堂、2016年
- ・アクティブラーニングを支えるカウンセリング24の基本スキル、小林昭文、ほんの森出版、2016年
- ・アクティブラーニング 大学の教授法3、中井俊樹、玉川大学出版部、2015年
- ・主体的学び4号 アクティブラーニングはこれでいいのか 主体的学び研究所、東信堂、2016年
- ・アクティブラーニングのデザイン 永田敬・林一雅、東京大学出版会 2016年
- ・学力の経済学、中室牧子、ディスカバー21、2016年

2015年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・ 高等教育の社会学、パトリシア・J・ガンポート、玉川大学出版部、2015年
- ・ 大学教育の変貌を考える、三宅義和、ミネルヴァ書房、2014年
- ・ 大学生の学習ダイナミクス、河井亨、東信堂、2014年
- ・ 大学は社会の希望か、江原武一、東信堂、2015年
- ・ 大学改革を問い直す、天野郁夫、慶応義塾大学出版会、2013年
- ・ アウトカムの基づく大学教育の質保証、深堀聰子、東信堂、2015年
- ・ 大学の I R Q & A、中井俊樹、玉川大学出版部、2013年
- ・ 大学版 I R の導入と活用の実際、佛淵孝夫、実業之日本社、2015年
- ・ 「深い学び」につながるアクティブラーニング、河合塾、東信堂、2013年
- ・ ラベルワークで進める参画型教育、林義樹、ナカニシヤ出版、2015年
- ・ 未来の大学教員を育てる、田口真奈、勁草書房、2013年
- ・ 協働で学ぶクリティカル・リーディング、舘岡洋子、ひつじ書房、2015年
- ・ 立命館大学（I R 方式・センター試験併用方式）、数学社編集部、数学社、2015年
- ・ アカデミック・アドバイジング、清水栄子、東信堂、2015年
- ・ 主体的学びにつなげる評価と学習方法、スー・フォスタティ・ヤング、東信堂、2013年
- ・ 主体的学び創刊号パラダイム転換、主体的学び研究所、東信堂、2014年
- ・ 主体的学び2号反転授業がすべてを解決するのか、主体的学び研究所、東信堂、2014年
- ・ 主体的学び3号アクティブラーニングとポートフォリオ、主体的学び研究所、東信堂、2015年
- ・ 思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント、関東地区 F D 連絡協議会、ミネルヴァ書房、2013年

2014年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・ シリーズ大学7巻対話の向こうの大学像、広田照幸、岩波書店、2014年
- ・ 高等教育研究 第1集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、1998年
- ・ 高等教育研究 第2集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、1999年
- ・ 高等教育研究 第3集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2000年
- ・ 高等教育研究 第4集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2001年
- ・ 高等教育研究 第9集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2006年
- ・ 高等教育研究 第10集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2007年
- ・ 高等教育研究 第11集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2008年

- ・ 高等教育研究 第13集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2010年
- ・ 高等教育研究 第14集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2011年
- ・ 高等教育研究 第16集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2013年
- ・ 高等教育研究 第17集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2014年
- ・ 現代教育制度改革への提言 上、日本教育制度学会、東信堂、2013年
- ・ 現代教育制度改革への提言 下、日本教育制度学会、東信堂、2013年
- ・ ディープアクティブラーニング、松下佳代、勁草書房、2015年
- ・ アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換、溝上慎一、東信堂、2014年
- ・ 教育方法原論、吉田卓司、三学出版、2013年
- ・ 学びの質を保証するアクティブラーニング、河合塾、東信堂、2014年
- ・ 学生の理解を重視する大学授業、ノエル・エントウイスル、玉川大学出版部、2010年
- ・ アメリカ研究大学の大学院、阿曾沼明裕、名古屋大学出版会、2014年

2013年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・ 大学入試の終焉、佐々木隆正、北海道大学出版会、2012年
- ・ 大学の教務Q & A、中井俊樹、玉川大学出版部、2013年
- ・ シリーズ大学1巻グローバルゼーション・社会変動と大学、吉田文、岩波書店、2013年
- ・ シリーズ大学2巻大衆化する大学、濱中淳子、岩波書店、2013年
- ・ シリーズ大学3巻大学とコスト、上山隆大、岩波書店、2013年
- ・ シリーズ大学4巻研究する大学、小林傳司、岩波書店、2013年
- ・ シリーズ大学5巻教育する大学、広田照幸、岩波書店、2013年
- ・ シリーズ大学6巻組織としての大学、広田照幸、岩波書店、2013年
- ・ 大学生のための「社会常識」講座、松野弘、ミネルヴァ書房、2011年
- ・ 大学生活を楽しむ護身術、宇田光、ナカニシヤ出版、2012年
- ・ 大学1年生からのコミュニケーション入門、中野美香、ナカニシヤ出版、2010年
- ・ 大学生からのプレゼンテーション入門、中野美香、ナカニシヤ出版、2012年
- ・ 新編大学学びのことはじめ、佐藤智明、ナカニシヤ出版、2011年
- ・ 理工系学生のための大学入門、金田徹、ナカニシヤ出版、2012年
- ・ プロフェッショナル・ディベロップメント、安藤厚、北海道大学出版会、2012年
- ・ 航行をはじめた専門職大学院、吉田文、東信堂、2010年
- ・ 日本とドイツの教師教育改革、渡邊満、東信堂、2010年
- ・ 教員養成学の誕生、遠藤孝夫、東信堂、2007年

- ・教育機会均等への挑戦、小林雅之、東信堂、2012年
- ・アメリカ連邦政府による大学生経済支援政策、犬塚典子、東信堂、2006年
- ・現代アメリカにおける学力形成論の展開、石井英真、東信堂、2011年
- ・アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング、唐木清志、東信堂、2010年
- ・ソーシャルキャピタルと生涯学習、ジョン・フィールド、東信堂、2011年
- ・ノンフォーマル教育の可能性、丸山英樹、新評論、2013年
- ・日本の社会教育・生涯学習、小林文人、大学教育出版、2013年

2012年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・比較教育学事典、日本比較教育学会編、東信堂、2012年
- ・大学のカリキュラムマネジメント－理論と実際－、中留武昭著、東信堂、2012年
- ・学生の学力と高等教育の質保証<1>、山内乾史緒、学文社、2012年
- ・教育学年報〈9〉大学改革（教育学年報9）、藤田英典（編集）、片桐芳雄（編集）、黒崎 勲（編集）、佐藤 学（編集）、世織書房2012年
- ・高等教育論入門、早田幸政（編集）、青野 透（編集）、諸星 裕（編集）、ミネルヴァ書房、2010年
- ・ボランティア教育の新地平、桜井 政成（編さん）、津止 正敏（編さん）著、ミネルヴァ書房 2009年
- ・大学生のためのリサーチリテラシー入門、山田剛史、林創著、ミネルヴァ書房、2011年
- ・大学における学習支援への挑戦、日本リメディアル教育学会監修、ナカニシヤ出版、2012年
- ・大学と変える大学教育、清水亮、橋本勝、松本美奈編、ナカニシヤ出版、2009年
- ・学生主体型授業の冒険、小田隆治、杉原真晃編著、ナカニシヤ出版、2010年
- ・大学におけるキャリア教育の実践、小樽商科大学地域研究会編 ナカニシヤ出版、2010年
- ・大学生のためのデザインキャリア、渡辺三枝子、五十嵐浩也、田中勝男、高野澤勝美著、ナカニシヤ出版、2011年
- ・大学生のキャリア発達、宮下一博著、ナカニシヤ出版、2010年
- ・協同学習の技法、E.F.Barkley/K.P.Cross/C.H.Major著、ナカニシヤ出版、2009年
- ・実践！アカデミックディベート、安藤香織、田所真生子編、ナカニシヤ出版、2002年
- ・生成する大学教育学、高等教育研究開発推進センター編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・学生・職員と創る大学教育、清水亮、橋本勝編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・学生の納得感を高める大学授業、山地弘起、橋本健夫編著、ナカニシヤ出版、2012年

- ・グローバルキャリア教育、友松篤信編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・大学教育の臨床的研究 田中每実著、東信堂、2011年
- ・スタンフォード 21世紀を創る大学、ホーン川嶋瑤子著、東信堂、2012年
- ・学士課程教育の質保証へむけて、山田礼子著、東信堂、2012年
- ・大学自らの総合力、寺崎昌男著、東信堂、2010年

2011年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・批判的思考力を育む、楠見 孝、子安増生、道田泰司、有斐閣、2011年
- ・高等教育室保証の国際比較、羽田貴史、杉本和弘、米澤彰純、東信堂、2009年
- ・私立大学の経営と拡大・再編、両角亜希子、東信堂 2010年
- ・学習経験をつくる大学授業法、L. デイヤー・フィンク、玉川大学出版部、2011年
- ・変貌する世界の大学教授職、有本 章、玉川大学出版部、2011年
- ・学級経営読本、小島 宏、玉川大学出版部、2012年
- ・転換期日本の大学改革、江原武一、東信堂、2010年
- ・成績評価の厳格化と学習支援システム 半田智久、地域科学研究会 2011年
- ・リーディングス 日本の教育と社会—⑫高等教育 塚原修一、広田照幸、日本図書センター、2009年

2010年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・大学の反省、猪木武徳、N T T出版、2009年
- ・2011年版大学ランキング、週刊朝日進学MOOK、2010年
- ・初年次教育でなぜ学生が成長するのか、河合塾、東信堂、2010年
- ・学力問題のウソ、小笠原喜康、P H P 研究所、2008年
- ・大学とキャンパスライフ 武内清 上智大学出版 2005年
- ・リーディングス 日本の教育と社会—第1巻 学力問題・ゆとり教育、中村高康編、玉川大学出版部、2010年
- ・リーディングス 日本の教育と社会—第3巻 子育て・しつけ、橋本鉦市編、玉川大学出版部、2010年
- ・リーディングス 日本の教育と社会—第5巻 大学と学問、阿曾沼明裕、玉川大学出版部、2010年
- ・リーディングス 日本の教育と社会—第6巻 歴史教科書問題、村澤昌崇編、玉川大学出版部、2010年

- ・大学と社会、安原義仁、放送大学教育振興会、2008年
- ・高等教育質保証の国際比較、羽田貴史、東信堂、2009年
- ・私立大学の経営と拡大・再編、両角亜希子、東信堂、2010年
- ・戦後日本産業の大学教育要求、飯吉弘子、東信堂、2008年
- ・大学教育を科学する、山田礼子、東信堂、2009年
- ・大学における書く力考える力、井下千以子、東信堂、2008年
- ・2010年版大学ランキング、朝日新聞出版、2009年
- ・「教育改革」と労働のいま、日本社会臨床学会、現代書館、2008年
- ・国際移動と教育、江原裕美、明石書店、2011年
- ・グローバル化時代の教育の選択、増淵幸男、上智大学出版、2010年
- ・大学の危機、草原克豪、弘文堂、2010年
- ・教育用語辞典、山崎英則編、ミネルヴァ書店、2003年
- ・教育学をひらく 鈴木敏正 青木書店 2009年
- ・「教育」としての職業指導の成立 石岡学 勁草書房 2011年
- ・大学を変える 東海高等教育研究所 大学教育出版 2010年
- ・シティズンシップへの教育 中山あおい 新曜社 2010年
- ・学校の挑戦 佐藤学 小学館 2006年
- ・教師花伝書 佐藤学 小学館 2009年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―③子育て・しつけ 広田照幸 日本図書センター
2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑤愛国心と教育 大内裕和 日本図書センター
2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑥歴史教科書問題 三谷博 日本図書センター
2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑦子どもと性 浅井春夫 日本図書センター 2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑧いじめ・不登校 伊藤茂樹 日本図書センター
2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑨非行・少年犯罪 伊藤茂樹 日本図書センター
2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑩子どもとニューメディア 北田暁大・大多和直樹
日本図書センター、2007年

2009年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第一巻、市川昭午、日本図書センター、2008年
- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第二巻、市川昭午、日本図書センター、2009年
- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第三巻、市川昭午、日本図書センター、2009年
- ・論文を書くためのWord利用法、くろしお出版、2009年
- ・知のナビゲーター、くろしお出版、2007年
 - ・知へのステップ 改訂版、くろしお出版、2006年
 - ・知のワークブック、くろしお出版、2006年
- ・落下傘学長奮闘記 黒木登志夫、中央公論新社、2009年
- ・最新教育データブック 第12版、清水一彦、時事通信出版局、2008年
- ・アカデミック・ポートフォリオ、ピーター・セルディン、玉川大学出版部、2009年
- ・基礎からわかるポートフォリオの作り方・すすめ方、佐藤真、東洋館出版社、2002年
- ・国民国家システムの変容、吉川宏、学術出版会、2008年
- ・アメリカの大学開放、五島敦子、学術出版会、2008年
- ・近代日本教育会史研究、梶山雅史、学術出版会、2007年
- ・臨時教育審議会、渡部蕨、学術出版会、2006年
- ・大学英語教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究、峯石緑、溪水社、2002年
- ・大学の實力、読売新聞社、中央公論新社、2009年
- ・大学を語る 22人の学長、玉川大学出版部、1997年
- ・大学個性化の戦略、玉川大学出版部、2000年
- ・大学教師の自己改善、玉川大学出版部、2000年
- ・大学進学の世界、小林雅之、東京大学出版会、2009年
- ・21世紀の教育を拓く、山田耕路、西日本新聞社、2009年
- ・高等教育質保証の国際比較、羽田貴史、東信堂、2009年
- ・教育とエビデンス、経済協力開発機構、明石書店、2009年
- ・教育研究ハンドブック、立田慶裕。世界思想社、2008年
- ・キャリア教育概説、日本キャリア教育学会、東洋館出版社、2008年
- ・変貌する日本の大学教授職、有本章、玉川大学出版部、2008年
- ・統計学から計量経済学入門、藤山英樹、昭和堂、2007年
- ・批判的リテラシーの教育、竹川慎哉、明石書店、2010年
- ・転換期を読み解く、潮木守一、東信堂、2009年

- ・リーディングス 日本の教育と社会 第1巻、学力問題・ゆとり教育、広田照幸、日本図書センター、2009年
- ・リーディングス 日本の教育と社会 第2巻、学歴社会・受験戦争、広田照幸、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会 第4巻、教育基本法、広田照幸、日本図書センター、2006年
- ・リーディングス 日本の教育と社会 第12巻、高等教育、広田照幸、日本図書センター、2009年

2008年度購入図書一覧（和書・順不同）

※学力低下は錯覚である、神永正博、森北出版、2008年（第9号に書評掲載）

- ・国立大学・法人化の行方、天野郁夫、東信堂、2008年
- ・フンボルト理念の終焉？—現代大学の新理念、潮木守一、東信堂、2008年
- ・教育人間論のルーマン、田中智志・山名淳、勁草書房、2004年
- ・他者の喪失から感受へ、田中智志、勁草書房、2002年
- ・大学生のための日本語表現トレーニング スキルアップ編、橋本修、三省堂、2008年
- ・自分 私を拓く、水原克敏、東北大出版、2003年
- ・三高の見果てぬ夢—中等・高等教育成立過程と折田彦市、巖平、思文閣出版、2008年
- ・札幌農学校と英語教育、外山敏雄、思文閣出版、1992年
- ・高等教育の経済分析と政策、矢野眞和、玉川大学出版部、1996年
- ・大学改革の海図、矢野眞和、玉川大学出版部、2005年
- ・教育社会の設計（UP選書）、矢野眞和、東京大学出版会、2001年
- ・入試改革の社会学、中澤渉、東洋館出版社、2007年
- ・大学とキャンパスライフ、武内清、上智大学出版、2008年
- ・学校システム論、竹内洋、放送大学教育振興会、2007年
- ・これからの教養教育—「カタ」の効用（未来を拓く人文・社会科学）、葛西康德、鈴木佳秀、東信堂、2008年
- ・団塊世代の同時代史（歴史文化ライブラリー）、天沼香、吉川弘文館、2007年
- ・戦後教育のなかの〈国民〉—乱反射するナショナリズム、小国喜弘、吉川弘文館、2007年
- ・知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開（MINERVA西洋史ライブラリー）、南川高志、吉川弘文館、2007年
- ・改めて「大学制度とは何か」を問う、舘昭、東信堂、2007年

- ・原点に立ち返っての大学改革、館 昭、東信堂、2006年
- ・30年後を展望する中規模大学マネジメント・学習支援・連携、市川太一、東信堂、2006年
- ・ティーチング・ポートフォリオ—授業改善の秘訣、土持ゲーリー法一、東信堂、2007年
- ・世界標準の読解力—OECD・PISAメソッドに学べ—、岡部憲治、白日社、2007年
- ・心理統計学の基礎—統合的理解のために、南風原朝和、有斐閣アルマSPECIALIZED、2002年
- ・実践的研究のすすめ—人間科学のリアリティ、小泉潤二・志水宏吉、有斐閣、2007年
- ・大学の学び・入門 大学での勉強は役に立つ！—、溝上慎一、有斐閣アルマINTEREST、2006年
- ・大学生の就職とキャリア—普通—の就活・個別の支援、小杉礼子、勁草書房、2007年
- ・大学生の職業意識とキャリア教育、谷内篤博、勁草書房、2005年
- ・働く意味とキャリア形成、谷内篤博、勁草書房、2007年
- ・キャリア教育と就業支援、小杉礼子・堀有喜衣、勁草書房、2006年
- ・教育史研究の最前線、教育学史会編、日本図書センター、2007年
- ・資料で読む前後日本と愛国心〈第1巻〉復興と模索の時代 一九四五～一九六〇、市川昭午、日本図書センター、2008年
- ・大学ランキング、「週刊朝日」進学MOOK、2008年
- ・日本の大学教授市場（高等教育シリーズ 142）、山野井敦徳、玉川大学出版部、2007年
- ・ベストプロフェッサー（高等教育シリーズ）、ケン・ベイン、玉川大学出版部、2008年
- ・大学の英語教育を変える—コミュニケーション力向上への実践指針、山地弘起、玉川大学出版部、2008年
- ・アメリカの学生獲得戦略（高等教育シリーズ）、山田礼子、玉川大学出版部、2008年
- ・大学教育を変える教育業績記録、ピーター・セルディン、玉川大学出版部、2007年

2007年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・大学を解体せよ、中野憲志、現代書館、2007年
- ・大学図鑑！2008、オバタカズユキ、ダイヤモンド社、2007年
- ・学生諸君！ 夏目漱石他、光文社、2006年
- ・大学教育のエクセレンスとガバナンス、地域科学研究会、地域科学研究会、2006年
- ・教育学事始め、氏家重信、北大路書房、2007年
- ・学生による教育再生会議、東京学生教育フォーラム、平凡社新書、2007年
- ・大学改革の社会学、天野郁夫、玉川大学出版部、2007年

- ・大学のイノベーション、坂本和一、東信堂、2007年
- ・あたらしい教養教育をめざして、大学教育学会、東信堂、2004年
- ・学力を育てる、志水宏吉、岩波書店、2006年
- ・大学ランキング、2008年版、週刊朝日進学 MOOK、朝日新聞社、2007年
- ・大学の教育力、金子元久、筑摩書房、2007年
- ・教育デザイン入門、実践的ソフトウェア教育コンソーシアム、オーム社、2007年
- ・大学改革その先を読む、寺崎昌男、東信堂、2007年
- ・大学卒業制度の崩壊、藤田整、文芸社、2007年
- ・大学教育の思想、絹川正吉、東信堂、2006年
- ・大学における初年次少人数教育と「学びの転換」、東北大学高等教育開発推進センター、東北大学出版会、2007年
- ・A O型入学選抜の多様な進化(上)、地域科学研究会、地域科学研究会、2000年
- ・A O型入学選抜の多様な進化(下)、地域科学研究会、地域科学研究会、2001年

2006年度購入図書一覧（和書・順不同）

※恐るべきお子さま大学生たち、ピーター・サックス、草思社、2000年（第6集に内容紹介掲載）

- ・息子・娘を成長させる大学、読売新聞社、読売新聞社、2006年
- ・潰れる大学・伸びる大学辛口採点 2007年版、梅津和郎、エール出版社、2005年
- ・大学ランキング 2007年版、朝日新聞社、朝日新聞社、2006年
- ・危ない大学・消える大学 2007年版、島野清志、エール出版社、2006年
- ・大学改革の社会学、天野郁夫、玉川大学出版部、2006年
- ・大学生活ナビ、玉川大学コア・F Y E教育センター編、玉川大学出版部、2006年
- ・大学論、エイブラハム・フレックスナー、玉川大学出版部、2005年
- ・プロフェッショナル化と大学、日本高等教育学会編、玉川大学出版部、2004年
- ・ヨーロッパの高等教育改革、ウーリッヒ・タイヒラー、玉川大学出版部、2006年
- ・アジアの高等教育改革、フィリップ・G・アルトバック&馬越徹編、玉川大学出版部 2006年
- ・戦後日本の高等教育改革政策、土持 ゲーリー法一、玉川大学出版部、2006年
- ・私学高等教育の潮流、Ph.G・アルトバック編、玉川大学出版部、2004年
- ・高等教育 改革の10年、日本高等教育学会編、玉川大学出版部、2003年
- ・大学教育「教育評価ハンドブック、ラリー・キーン&マイケル・D・ワガナー、玉川

大学出版部、2003年

- ・知識基盤社会と大学の挑戦、佐々木毅、東京大学出版会、2006年
- ・オランダの個別教育はなぜ成功したのか、リヒテル直子、平凡社、2006年
- ・じょうずな勉強法、麻柄啓一、北大路書房、2005年
- ・大学講義の改革、宇田光、北大路書房、2005年
- ・大学基礎講座 改増版、藤田哲也、北大路書房、2006年
- ・”学生”になる！、浦上昌則、北大路書房、2006年
- ・SD（スタッフ・ディベロップメント）が育てる大学経営人材、山本眞一、文葉社、2004年
- ・21世紀の大学職員像、立命館大学、かもがわ出版、2005年
- ・人が学ぶということ、今井むつみ、野島久雄、北樹出版、2003年
- ・研究計画書デザイン、細川英雄、東京図書、2006年
- ・これで書ける！大学院研究計画書攻略法、進研アカデミーグラデュエート大学部編、オクムラ書店、2002年
- ・大学力、有本章、北垣郁雄、ミネルヴァ書房、2006年
- ・大学激動、朝日新聞社、朝日新聞社、2003年
- ・大学事務職員のための高等教育システム論、山本眞一、文葉社、2006年
- ・認知心理学者 新しい学びを語る、森敏昭、北大路書房、2002年
- ・授業を変える、米国学術研究推進会議、北大路書房、2002年
- ・学力低下論争、市川伸一、ちくま新書、2002年
- ・学ぶ意欲の心理学、市川伸一、P H P 研究所、2001年
- ・学ぶこと・教えること、鹿毛雅治、金子書房、1997年
- ・授業デザインの最前線、高垣マユミ、北大路書房、2005年
- ・教材設計マニュアル、鈴木克明、北大路書房、2002年
- ・大学講義の改革、宇田光、北大路書房、2005年
- ・教育力、斎藤孝、岩波新書、2007年

所収和雑誌

- | | | |
|----------|-------------|----------------|
| ・大学教育学会誌 | 1980年～ | No.1～（旧一般教育会誌） |
| ・大学資料 | 1989年～ | No.139～ |
| ・大学と学生 | 1989年～2011年 | No.397～565 |
| ・内外教育 | 1989年～ | No.4023～ |

・ 文部科学時報	1989年～2012年	No.1344～1635
・ 教育委員会月報	1989年～	No.465～
・ 教育情報パック	1990年～2007	No.401～806
・ I D E ー現代の高等教育	1991年～	No.276～

所収資料

・ 発達障害白書	1996年～2001年
・ 文部科学白書	1996年～（旧我が国の文教政策）
・ 学校基本調査報告書	1992年～（初等中等教育、高等教育）

既刊「教育研究所報告書」の主要内容

第17集 2017年3月

○研究報告

- ・COC+事業における地域教育科目の設計と運用 松崎 光弘
- ・CAP制は学生の履修行動をどのように変えたか
—CAP制導入の「意図せざる結果」— 片瀬 一男

○報告

- ・英語教育センター2016年度の活動 渡部 友子

第16集 2016年3月

○研究報告

- ・本学における不本意入学者の特徴（2）
東北学院大学新入生意識調査の分析 2011-2015 神林 博史
- ・東北学院大学における教育の現状と課題
—2009-14年度卒業時調査の分析— 片瀬 一男
- ・ディープ・アクティブラーニングにおける複雑性の活用 松崎 光弘

○報告

- ・英語教育センター発足までの経緯と初年度の活動 渡部 友子

第15集 2015年3月

○研究報告

- ・本学における成績評価の現状—教員アンケート調査結果の概要— 斎藤 誠
- ・2014年度新入生意識調査から見た新入生の特徴と入学後成績の関係 神林 博史
- ・大学生活の評価(2)—「2013年度卒業生意識調査」より 片瀬 一男
- ・“TGベーシック”の現状と課題
—カリキュラム導入からの2年を振り返って— 千葉 昭彦
- ・理科教育を考える 佐藤 篤

第14集 2014年3月

○研究報告

- ・大学生活の評価—「2012年度卒業生意識調査」より 片瀬 一男

- ・ 本学における不本意入学者の特徴：
東北学院大学新入生意識調査の分析 神林 博史
- ・ 本学の共通英語教育のあり方を考える
—英語教育の最近の動向を踏まえて— 渡部 友子

第13集 2013年3月

○研究報告

- ・ 現実感をもった英語教育を：英語教育改革私案 渡部 友子
- ・ 「大学組織の意思決定における職員参加」調査報告 亀谷 純

○報告

- ・ 今回の本学教養教育改革について—その背景、意義と今後の課題— 斎藤 誠

第12集 2012年3月

○研究報告

- ・ アカデミックスキル・ルーブリックの開発—初年次教育におけるスキル評価の試み—
葛西 耕市・稲垣 忠

○報告

- ・ 「学生生活実態調査」(2006年・2010年)にみられる本学学生の特徴
—私大連全体との比較の中で— 斎藤 誠

○書評

- ・ 今日の「大学改革」の可能性 —潮木守— 『フンボルト理念の終焉？現代大学の新次元』
を読んで— 千葉 昭彦

○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第3回

- ・ 教養教育雑感 —自然科学教員が見た大学教育— 高橋 光一

第11集 2011年3月

○研究報告

- ・ 初年次教育による高校と大学の接続—東北学院大学教養学部の場合—
片瀬 一男・葛西 耕市
- ・ 入試方法と学業成績—東北学院大学2009年度卒業生データの分析— 神林 博史

○報告

- ・ 2009年度「卒業時意識調査」報告 加藤 健二

○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第2回

・東北学院（大学）の英語教育を考える

戸田 征男

第10集 2010年3月

○特別報告

・本学の教育課程改革にむけての私案

斎藤 誠

○研究報告

・AO入試に関する試論（3）

片瀬 一男

—なぜ入試改革は「失敗」しつづけたのか？

：東北学院大学工学部の場合—

・日本の大学の「教養教育」の新たな動向

—日本社会や大学教育の構造転換の中で—

岩谷 信

○報告

・2009年度「新入生意識調査」について

教育研究所

○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第1回

・「自己チュー」批判論の盲点

—予言された「ナルキッソスの死」の意味—

岩谷 信

第9集 2009年3月

○研究報告

・AO入試に関する試論（2）

片瀬 一男

—AO入試はA型学生を選抜したのか、それともO型学生に選好されたのか？

：東北学院大学文科系学部の場合—

・教養教育科目としての「キリスト教学」の意味と課題

佐藤 司郎

・性の多様性に対応する人権教育についての考察

魚橋 慶子

○報告

・「大学生の勉強法」を教える初年時授業

—「言語文化基礎演習」の授業内容とその改善プロセス

佐伯 啓

・学士課程教育のめざす方向とその背景

吉村功太郎

○図書紹介

・神永正博著『学力低下は錯覚である』

菅山 真次

第8集 2008年3月

○報告

- ・初年次教育としての「大学生活入門」—法学部における実践報告— 齊藤 誠
- ・社会変容とこれからの教養教育 佐々木俊三

○研究報告

- ・AO入試に関する試論(1)
—教養学部におけるAO入試入学者の成績を事例に— 片瀬 一男

○特別報告

- ・各大学の「大学教育センター」系組織とその特色
—本学の「教育力の向上」を目指して・準備資料— 教育研究所・所員会議

第7集 2007年3月

○特別報告

「大学教育への取り組みに関する調査」(2006年11月実施)

- ・ユニバーサル化した大学における教員の苦悩
—東北学院大学の教員意識調査から— 片瀬 一男
- ・跋：調査報告書を読んで 副学長(学務担当) 大塚 浩司

○報告

- ・経済学科原級留の実態とその要因の調査報告 千葉 昭彦

○教育研究所所蔵図書紹介

- ・『恐るべきお子さま大学生—崩壊するアメリカの大学』 松本 洋之

第6集 2006年3月

○報告論文

- ・「工学基礎教育センター」の果たす役割と期待 石橋良信、星 善元、女川 淳
- ・文学部歴史学科におけるキャリア支援教育
—「就職の基礎」の〈解説〉を中心に— 楠 義彦

○研究報告

- ・ハビトゥスとしての読書の力
—東北学院大生の図書館利用と学業成績— 片瀬 一男

第5集 2005年3月

○報告論文

- ・成績分析からみた大学教育研究(4)
—アドミッションズ・オフィス方式による入学生の学業成績を中心に— 大江 篤志
- ・経済学科生の入試類型別成績
調査報告本学経済学科生の成績と入試類型との関連について 原田 善教
- ・退学者動向・調査報告(1) 教養学部の場合
意欲があって大学を去る者、意欲を失ってやめる者
二つの不幸な退学理由へのブール代数アプローチ 片瀬 一男

○特別報告

- ・教養学部「学生による授業評価」実施概要 教養学部授業評価委員会

第4集 2004年3月

○報告論文

- ・東北学院大学工学部における教育改善の試みと将来構想
石橋良信、星 善元、小野 孝、志子田有光、石川雅美
- ・カード利用による「事案のルール」獲得の可能性 陶久 利彦
- ・互惠を原則とした地域と大学との連携
—東北学院大学の社会教育実習・ボランティア活動の実践— 水谷 修
- ・NPOが大学と連携することの意義
—東北学院大学「ボランティア活動」への取り組み—
特定非営利活動法人グループゆう 中村 祥子
- ・東北学院大学と連携した講座造り実習の取り組み
仙台市中央市民センター 今川 義博

第3集 2003年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(3) 大江 篤志

入学類型と全学共通科目学業成績との関係を中心に

1. 課題と方法 (1)目的 (2)方法 分析対象とする学生/入学類型/全学共通科目/
英語系科目A1/英語系科目A2/4科目の学業成績の関係
2. 全学共通科目の学科別学業成績平均 (1)キリスト教学系科目X1 (2)キリスト教学
系科目X2 (3)英語系科目A1 (4)英語系科目A2 (5)4科目の学業成績の関係

3. 文学部 3-1英文学科 キリスト教系科目X 1. X 2 3-2史学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
3. 経済学部 4-1経済学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
4-2商学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
4. 法学部法律学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
5. 工学部 6-1機械工学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
6-2電気工学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
6-3応用物理学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
6-4土木工学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
1. 教養学部教養学科 7-1人間科学専攻 キリスト教系科目X 1. X 2 /
英語系科目A 1, A 2 7-2言語科学専攻 キリスト教系科目X 1. X 2 /
英語系科目A 1, A 2 7-3情報科学専攻 キリスト教系科目X 1. X 2 /
英語系科目A 1, A 2
2. 二部 8-1二部英文科 キリスト教系科目X 1. X 2
8-2二部経済学科 キリスト教系科目X 1. X 2 / 英語系科目A 1, A 2
3. 総括と検討 9-1主要入学類型の分布 男子 / 女子 9-2学科内部における学業成績の男女差 9-3入学類型別にみた学業成績の男女差 キリスト学系科目 / 英語系科目 9-4入学類型と学業成績 キリスト学系科目 / 英語系科目 / キリスト教系科目と英語系科目の関係

おわりに

第2集 2002年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(2)

大江篤志・水谷 修、他

入学類型と学業成績との関係

4. 課題と方法 (1)目的 (2)方法
5. 文学部 2-1英文学科 入学類型の分布 / 登録科目, 放棄科目, 学業成績 / 学業成績 / 英文科小括 2-2史学科 入学類型の分布 / 登録科目, 放棄科目, 学業成績 / 学業成績 / 史学科小括
6. 経済学部 3-1経済学科 入学類型の分布 / 登録科目, 放棄科目, 学業成績 / 学業成績 / 経済学科小括 3-2商学科 入学類型の分布 / 登録科目, 放棄科目, 学業成績 / 学業成績 / 商学科小括
7. 法学部法律学科 入学類型の分布 / 登録科目, 放棄科目, 学業成績 / 学業成績 /

法律学科小括

8. 教養学部教養学科 5-1人間科学専攻 入学類型の分布／登録科目, 放棄科目, 学業成績／学業成績／人間科学専攻小括 5-2言語科学専攻 入学類型の分布／登録科目, 放棄科目, 学業成績／学業成績／言語科学専攻小括 5-3情報科学専攻 入学類型の分布／登録科目, 放棄科目, 学業成績／学業成績／情報科学専攻小括
9. 二部 6-1二部英文科 入学類型の分布／登録科目, 放棄科目, 学業成績／学業成績／二部英文学科小括 6-2二部経済学科 入学類型の分布／登録科目, 放棄科目, 学業成績／学業成績／二部経済学科小括

おわりに

第1集 2001年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(1)

大江篤志・水谷 修

はじめに

1. 各学科の学生構成 (1)問題関心 (2)学部学科別学生数 (3)各学科の男女比
2. 対象卒業生の成績
3. 合否、法規科目数の学科男女別分布 文学部四学科 経済学部三学科
法学部法律学科 教養学部 小括
4. 学生の移動の場 4-1-(1)入学類型の多様化 (2)留年と原級留置き、休学と退学
(3)科目の性格 (4)教員カテゴリー (5)課外活動などとの関連
4-2-開放系システムとしての大学教育

東北学院大学教育研究所規程

(制定平成10年4月1日)

平成10年4月1日制定第7号

改正 平成27年7月2日改正第58号

(設置)

第1条 東北学院大学（以下「本学」という。）に教育研究所（以下「本研究所」という。）を置く。

(目的)

第2条 本研究所は、本学教育及び高等教育に関する調査研究及び提言を行い、本学教育の改善に資することを目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は、前条の目的達成のため次に掲げる事業を行う。

- (1) 本学教育（学生の学修行動及び学修成果を含む。）の現状に関する調査研究
- (2) 本学教育の基本問題に関する研究
- (3) 高等教育の基本問題に関する研究
- (4) 本学教育の改善に関する提言
- (5) 報告書等の刊行、講演会等の開催
- (6) 各号に掲げる事業実施に必要な資料の収集及び整理
- (7) 第1号から第5号に掲げる事業実施に関する情報提供
- (8) その他本研究所の目的遂行に必要な事業

(組織)

第4条 本研究所は、所長1名、所員若干名をもって組織する。

(所長)

第5条 所長は、学長が委嘱するものとする。

- 2 所長の任期は2年とし、再任を妨げない。

(所員)

第6条 所員は、本学の専任教員から所長が推薦し、学長が委嘱する。

- 2 所員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(総会)

第7条 総会は、年2回所長が招集する。ただし所長が必要と認めるときは、臨時総会を招集することができる。

- 2 総会は、所員の過半数の出席がなければ開くことができない。
- 3 総会の議長は、所長をもって充てる。
- 4 総会は、本研究所の事業及びこれに関することを審議する。
- 5 総会の決議は、出席者の過半数をもって決する。

(事務職員)

第8条 本研究所に事務職員若干名を置く。

- 2 事務職員は、本研究所の事業遂行に必要な事務を処理する。

(経費)

第9条 本研究所の費用は基金、寄附金、事業収入及び本学からの補助金によって支弁する。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、総会が発議し、教授会の議を経て学長が行い、理事会の承認を得るものとする。

附 則

- 1 この規程は、平成10（1998）年4月1日から施行する。
- 2 昭和42年4月1日制定の東北学院大学教育研究所規程及び昭和47年10月1日制定の東北学院大学一般教育研究所規程は廃止する。

附 則（平成27年7月1日改正第58号）

この規程は、平成27（2015）年7月1日から施行し、平成27（2015）年4月1日から適用する